

性、聖母マリア、(死後の列聖によって)聖女となる女性は過去の存在・希少性・幻視体験や想念における出会い・想起を特徴とし、魔女は現在的存在・夥多性・現実の中での出会い(経験)を特徴とする。聖女は過去志向性のもとで把握される存在であるのに対して、魔女は現在志向性のもとで把握される存在である。このような聖女と魔女の特徴を、家父長制が進展し、女性の社会的地位が低下していった中世末から近世にかけての西洋社会の状況のもとで捉えなおすと、聖女はいわば想念の中に存在する女性の(偽りの表象)であったのに対して、魔女は日常生活の中で経験・目撃される(真なる表象)であったと言えるだろう。

『魔女の槌』という文献史料上の言説から明らかにする以上のような聖女と魔女の関係性は、同時代の図像史料によっても確認できる。図像は言説がイメージ化されたもの(表象)とも言える。ハンス・バルドゥング・グリーン(一四八四/八五一五四五年)はシュトラースブルクで活躍した画家であり、魔女、死と女、原罪、聖母マリアに関わる図像を数多く残したことで知られる。シュトラースブルクは『魔女の槌』中で言及され、一六世紀初めには大聖堂で魔女断罪の説教が行われるなど魔女と因縁浅からぬ土地であった。そのような土地で人生の大半を過ごしたバルドゥング・グリーンが魔女裁判研究史上、「最初の魔女のサバトの絵(版画)」と言われるものを作成したのは一五一〇年のことである。同時期にバルドゥング・グリーンは死と女、原罪、聖母マリアに関わる図像も制作している。この時期以降も生涯にわたってバルドゥング・グリーンは聖母

マリアと魔女に関わる図像を多く生み出したが、それらの図像の解読から聖母マリアは過去的存在として、またイエスの母として、いわば「理想主義的」に描写される一方、魔女はイヴおよび「死」に追われる女、また年齢を重ねるとともに老女と化していく女と重ね合わされることによって「現実的存在」として描写されていることが指摘できる。バルドゥング・グリーンが晩年に残した「魔法にかけられた馬丁」(一五四四年)では、魔女は農村の貧しい老女を思わせる姿で描かれており、その描写は極めて現実主義的である。

西洋中世末・近世における聖女と魔女の二極分解の関係性には、現在性と過去性といった時間性、および「現実」と「理想」といった概念が関係している。

いわゆる『魔女への鉄槌』における

「魔女」概念について

野村 仁子

一四八七年に出版され、今日魔女裁判の元凶になった著書と評されている *Malleus Maleficarum* は、ドイツ語では *Der Hexenhammer*、英語では *The Hammer of Witches* と訳され、日本語では『魔女への鉄槌』と訳されている。しかしながら、Hexe (魔女) と訳されている *malefica* という言葉には、語源的に魔女という意味は含まれていない。それは字義通りにとらえれば、「悪事を行う者(女性)」という意味である。

『鉄槌』では、*malefica* とは「*maleficium* (悪事、悪行) によって害をなす者」であると位置づけている。言い換えれば、*malefica* の根幹は *maleficium* にある。『鉄槌』において、*maleficium* がどのようなものであり、どのように定義されたのかを考察することによって、中世後期のヨーロッパにおいて悪とは何であったのかが見えてくるのではないかと思われる。

まず、同書において *maleficium* を行うには、三つの条件、神の許可、悪魔との契約、魔女が必要であった。魔女とは、悪魔にとって世界を滅ぼすために必要な自由意志を持った道具としての人間である。しかしながら、人間には不思議なことを起こすことは不可能である。なぜなら、人間の力には、神が作った被造物を混乱させる能力はないからである。そこで次に必要なものが、悪魔との契約である。元は天使であった悪魔は人間よりもより優れた能力を持っている。それ故、悪魔と契約することによって悪魔の力をもって *maleficium* に害を及ぼす力を与えることができるようになるのである。最後に、*maleficium* には神の許可が必要である。もし神が地上において悪が起ることを禁じているのならば、*maleficium* を行うことはできないからである。

『鉄槌』において *maleficium* は次の六つに大別できる。一、性愛にかかわる魔術。二、動物への変身や飛行。三、他者や動物を病気にしたり殺したりすること。四、産婆による赤子殺し、悪魔への赤子の献呈。五、家畜に被害をもたらすこと。六、嵐・雹・雷を起こすこと。このように見ると、*maleficium* とは二を除いて、何か特別なことではなく、人間が生きている上

で起こりうる不幸や不運といったものの解釈の枠組であったことがわかる。たとえば、結婚しても何らかの原因で出産に至らないことは現代においてもあることであるが、それは、夫婦以外の特定の人物の所行として告発される事柄ではない。人間や動物の病気や死もほとんどの場合は自然の摂理に基づくものであり、本来それは「善の欠如」であり、悪魔や魔女のせいとみなされることのない事象である。さらに、嵐・雹・雷のような自然現象も、自然悪と所産的な悪、言い換えれば、「善の欠如」と「自由意志による悪」とを混同しなければ、ある人物のせいとはみなされないだろう。『鉄槌』は「善の欠如」と「自由意志による悪」というキリスト教における悪を混同させていき、「魔女」という存在を作り出したのである。

『鉄槌』の最初の研究者 Joseph Hansen が指摘した通り、『鉄槌』の中に新しい魔女の概念というものはなく、それまでに存在した異端審問官たちが抱いていた魔女妄想を繰り返しただけである。しかし、『鉄槌』において *maleficium* は単なる妄想ではなく、神学的根拠があると論証された。その結果、*maleficium* は *Hexe*、つまり「魔女」であると断定され、如何なる反論も許されることのない宗教上の犯罪者、それもユダヤ教やイスラム教といった異教を信じる者や、カタリ派やヴァルド派といった異端者たちよりもより悪に傾倒した、最悪かつ極悪な存在であると見なされていたのである。